仏陀の生涯

岩波写真文庫 181

仏陀の生涯
181

岩波写真文庫 181　仏陀の生涯

編集　岩波書店編集部
監修　町田甲一
写真　岩波映画製作所

はじめに

文字がまだ今日の様に普及しなかった頃、宗教はその教義を説き、教史を教えるために絵や彫刻の力を借りることが多かった。多くの聖伝を図示した浮彫や聖者達の彫像を刻んだ中世のクリスト教聖堂が、「石の百科全書」、「貧しき人々のための聖書」と呼ばれたのもその故であるが、仏教に於ては、それよりも遥かに古くより、彫刻された石が教祖釈尊の前生に於ける修道善行の物語や、その最後の生涯に於ける諸々の事蹟を語りつづけていた。そして、それらは当時の人々に対して、今日の我々に対するよりも遥かに直截に、遥かに平易に、その内容を語っていたのである。

文字に頼りすぎた今日の我々には黙して最早や多くを語らぬ其等の遺品をして、もう一度物語らせてみよう。往時の庶民の素朴な心にたちかえって耳傾けたならば、その声なき言葉を再び生き生きときくことができるであろう。

目　次

誕生仏
奈良　東大寺蔵

定価100円 1956年 3月25日第1刷発行 1958年 4月20日 第3刷発行 © 発行者 岩波雄二郎 印刷者 米屋勇 印刷所 東京都港区芝浦2ノ1 半七写真印刷工業株式会社 製本所 永井製本所 発行所 東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3 株式会社岩波書店

ギリシアのいわゆるアルカイック時代が漸く末に近づいた頃、インドでは十六の大国が互にその勢を競っていた。これらの中、中インドのラージァグリハ(王舎城)を都として摩伽陀地方一帯を領有するシァイシュナーガ王家が次第に勢を得、その第五世のビムビサーラ(頻毘娑羅)王及び第六世アジァータシァトル(阿闍世)王の時代に最も強大となった。紀元前六世紀後半より五世紀初葉にかかる時代で、時恰もペルシァのダレイオス一世の時代にあたっていた。

この頃、この地方を舞台にして二人の偉大な思想家が活躍した。その一人はジァイナ教の教祖ヴァルドハマーナ・マハーヴィラ(大勇)であり、他の一人は仏教の祖、釈迦牟尼世尊であった。この両者はともに刹帝利階級の出身で、その思想系統は、婆羅門階級至上の姓階制度を堅持してヴェーダの権威を強調する婆羅門教に対する非婆羅門教系に属していた。

仏教及びジァイナ教の隆盛は、必然的に婆羅門教の教勢を弱めたが、紀元後五、六世紀のグプタ朝時代になって、古代婆羅門教の血筋をひいたヒンドゥ教(印度教)が、これらに対する反動として復興運動の波に乗って再び往時の隆昌を得るようになると、漸く衰え、一時は西北インドのガンダーラより、南は南海のセイロンに至るまでの全インドの領域に普く弘伝した仏教は、特に、急激に教勢をせばめられて行き、八世紀以降には嘗ての発祥の地方一帯にまで後退し、更にはイスラム(回教)の侵犯を受けてそのあくなき廃仏にあい、遂にインド本土に於て潰滅の運命を迎えなければならなかった。

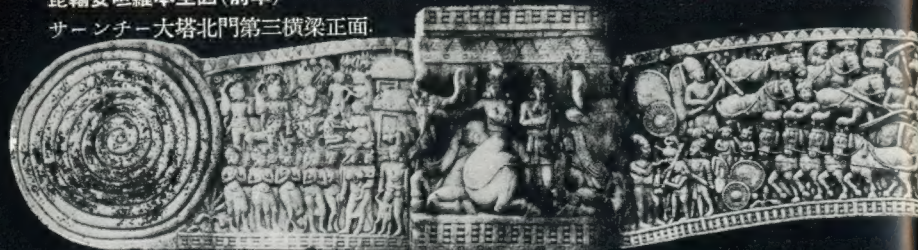
しかし、仏教は本土に於ては遂にその命脈を絶ちながら、或いは南海のセイロンに於て、或いは西域を経て弘伝された中国や日本に於て、今日なおその法燈を伝えて、広く全アジアの伝統的文化の基盤を依然として支えている。そして、或いは礼拝の対象として、或いは布教のための方便として、或いはまた、寺院その他の装飾として、製作された多くの美術遺品を、故郷のインドに於てのみならず広く全アジアの各地にのこしている。その点、仏教は、インド本土以外の異邦にまで及ぶことのなかったジァイナ教に比べて、遥かに多くの遺品を有しており、比較にならぬ程に広汎なその分布領域をもっていた訳である。

輪廻思想と本生話及び仏伝

輪廻と業と解脱の観念は、互いに密接な関係をもちつつ、独り仏教のみに限らず、インド精神史の最も重要な基本概念になっている。霊魂が肉体の死後、他のものに移行して新しい生を営むという転生の思想は、決してインド民族に限られたものではないが、インドではヴェーダ時代(紀元前一五〇〇—八〇〇)に、最もプリミティーフな形を以て現われている。そしてウパニシャドの中には、これがかなり明白な輪廻思想の形をとって現われ、更に「業」(カルマン)の思想と結びついて、人間の霊魂は死後その生前の業(行為)の応報として新しい生を得、その果報のつきる時、また新しくその業の応報として他の生を得、かくして尽くる所なく永恒流転して転生をくりかえして行くという思想を生んでいる。そしてその窮極解脱の状態を、仏教では涅槃(ニルヴァーナ)と呼んでいる訳である。釈尊は後述の如く、三十五歳の時、仏陀伽耶の畢波羅樹下に於て悟りを開き、その後四十五年にして拘尸那竭羅の娑羅双樹の下に涅槃に入られた訳であるが、釈尊に限らず成道して「仏陀」となるものは、殆んど無限に近い年月の間、もろもろの生類に生れかわり、死にかわって、数々の難行苦行を修し、菩薩行を行って多くの善行をおさめ、善根を植え、功をつみ徳を重ね、最後に悟りを開き正覚を成じて「仏陀」となるのである。釈尊の場合も、仏陀伽耶の畢波羅樹下に成道して拘尸那竭羅の娑羅双樹の下で涅槃に入られたその最後の生の前に、多くの生を経て菩薩行を修せられてきた訳で、その前生に於ける修業時代の物語を本生話(闍陀伽)といい、これを図示したものを本生図とよんでいる。これに対し、浄飯王の王子悉達多太子と生れて以来の最後の生涯に於ける物語は仏伝と呼ばれ、これを図示したものが仏伝図である。

毘輪安咀羅本生図 象を布施するところ
ガンダーラ地方出土．高さ 28 cm.
ボストン美術館蔵．

毘輸安呾羅本生図(前半)

サーンチー大塔北門第三横梁正面.

⑤耶利の手をひき，罽拏を抱いて山中を歩く．⑥後景は草庵．

④馬を布施し，自ら車をひく．後景に婆羅門馬車に乗り去る．

③４頭立て馬車で檀特山に向う．

②父王と訣別傘蓋下の父王．

①白象を布施．婆羅門の手に水を注ぐは布施を表わす．

独角仙人の図を刻む．毘輸安呾羅本生とは関係がない．

釈尊の前世における修業物語を描いた本生図は、極めて多種に及び、実数も夥しい数にのぼっているが、中でも最も好んで繰返し表現されたものは毘輸安呾羅本生、六牙白象本生、尸毘王本生、摩訶薩埵本生等である。この中、毘輸安呾羅本生は須太拏本生とも呼ばれ、印度のみならず西域や中国にもその作例が多く、また摩訶薩埵本生は印度本土では殆んどその遺例を見ないにも拘らず、西域、中国、日本に於て多数製作されていた。最も代表的なこれ等について、ざっとみていってみよう。

毘輸安呾羅本生

釈尊がその前生に於て尸毘国の薩闍王の王子毘輸安呾羅(須太拏)として生れた時の話。王子は人々に布施することを心掛け、求められれば何物をも惜しみなく施し与えていた。偶〻父王は百戦必勝の強い白象を持っていたが、その宿敵たるカリンガの王は一計を案じて王子の布施心を利用し、一婆羅門をして王子にその白象を乞わしめ巧みにこれを得てしまった(第一景)。国の安泰を守る国宝の象を失った民衆は大いに怒り、国王をして王子を国外に追放せしめると、王子は妃の曼坻と耶利及び罽拏の一男一女を伴って王城を出(第二景)、四頭立ての馬車にのり檀特山に向う(第三景)。その途中一婆羅門にあい馬を求められて譲り、自ら車を曳いて行くと(第四景)、山中でまた一婆羅門に会い、乞われるままに衣服や妃や二児の宝石などをも施与して遂に無一物となり(第五景)、山中の草庵に止住することになった(第六景)。かくて山中に隠者の生活を送ることになったが、或日ジュージァカと呼ぶ貧窮婆羅門がその妻に唆かされて妃の不在中に王子を訪ねて二児を奴隷に乞い、王子愛情を殺して之に与えると(第七景)、婆羅門は二児を鞭うちつつ去って行く(第八景)。そこで諸天衆相議り、王子の布施心の完全か否かを最後に妃を乞うてためしてみることにし、帝釈天が婆羅門に化して王子の前に現われ妃を乞うと(第九景)、王子は直ちに之を与えんとした。ここに王子の布施波羅密行の完全が立証され、帝釈天は本身を現じ、妃を王子に返してその菩薩行を讃嘆した(第十景)。そこで王子は妃を伴い故郷に向うと、父王と、すでに貧窮婆羅門から買い戻されていた二児の出迎えを受け(第十一景)、やがて帰城して王位につき善政を行ったという話である。

ルル鹿本生

婆羅捺斯国の富商の息が放蕩の末、恒河に入水した所、河畔の森に住む美しいルル鹿がこれをみつけ、我身の危険をおかして河中より溺れかかるその男を救ったが(第一景)、此の鹿をその国の王妃が莫大な賞金をかけて求めていることを知った其の忘恩の放蕩息子は、賞金ほしさに恩あるルル鹿を国王に密告する(第二景)。その結果、国王の軍はルル鹿を追い遂に之を射んとするが、鹿はその時、国王の前に進み事の次第を告げると、国王は鹿の善行に感嘆して合掌し、忘恩の男を殺そうとするが、鹿は再び此の男のために命ごいをしてやったという話で、ルル鹿が釈尊の前生であったという。

毘輸安呾羅本生図(後半) 背面.

父王薩闍王の居城を表わす.

⑪父王及び２児の出迎え.

⑨妃を布施す(下). ⑩帝釈天本身を現わし夫妻相擁しよろこぶ(上).

⑦２児を施与．⑧婆羅門打擲しつつ去る．

⑥山中での生活．

⑤(上図左端)と重複．２児を伴い，山中を歩む王子夫妻．左は河畔に妃を慰める王子をきざむ．

ルル鹿本生図　バールフト欄楯浮彫　カルカッタ印度博物館蔵　径四九糎

②国王に密告(右上).

③国王合掌(中央)

①男を急流より救出(下).

六牙白象本生

昔、雪山(ヒマラヤ)山中の湖のほとりの尼拘律陀樹(ニグローダ)の下に五百の一族と共に群棲していた六牙を有する象王が、嫉妬のために憤死した小夫人の宿怨を受けて僧服をまとった猟師に謀殺され、苦痛をしのんでその六本の牙を施与した話である。略述すると、この象王に両妻あって、或る日池畔に遊んだ折、水中の一茎の蓮華を象王がその大夫人に手折ってやった所、これが計らずも小夫人の嫉妬を招く結果となり、これがもとで小夫人は病を得てやがて憤死するが、転生してこの宿怨を晴さんものと念願し、その念願かなって人間界に再生する。そして、婆羅捺斯(バーラーナシー)国の王妃となるが、或る日前生の宿怨を晴さんとて国内の猟師を集め、六牙の白象の牙をとってくることを命じた所、南方の一猟師がこれを応諾した。そこで王妃は、象王の信心の深きを承知しているので、猟師に、象王の所に至ったならば道辺に坑を掘り、鬚髪(しゅはつ)を剃り僧服をまとって坑中に身をかくし、これより象王を射よと教えた。かくして猟師は王妃の教えた通りにして坑中より毒矢をもって象王を射ると、象王は僧服を認めて之を害せず、何故に我が命を害うやと問い、早く牙をとれとて苦痛をしのんで六牙を猟師に施与した。猟師は六牙を斬って帰城し、これを王妃に献ずるが、王妃はこれを見るや忽ちにして心臓を破り吐血して悶死したという。そして、その象王が釈尊の前身であり、猟師が提婆達多(デーヴァダッタ)であったと説いている。この本生図は、本頁のガンダーラ出土の他に、バールフト、ボッド・ガヤー、サーンチー、アマラーヴァティー、アジァンター等にも表現されている。

六牙白象本生図　象王を射るところ(左)と牙を斬るところ(右). ガンダーラ地方 カラマール出土. 高さ 16 cm. ラホール博物館蔵.

尸毘王本生図　腹の肉，足の肉を斬りとるところ(左)と之を秤にかけるところ(右)を表わす．右は帝釈天と毘首羯摩天．左の尸毘王の足もとに鳩を刻む．ガンダーラ，　スワート地方出土．　大英博物館蔵．

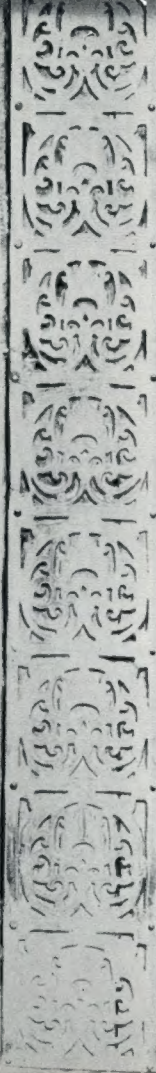
尸毘王本生

釈尊がその前生に於て、提婆抜提城の尸毘王として生れ、大慈悲の菩薩行を修し給うた時の話である。正法を以て八万四千の諸小国を治め、大慈大悲の心を以て弘く一切のものに及ぼして名声極めて高かったが、或る日帝釈天は毘首羯摩天と相議り、帝釈天自ら鷹と化し、毘首羯摩の化した鳩を追って、尸毘王の大慈悲行を試みることとし、鳩に化した毘首羯摩は鷹に追われて尸毘王の腋下に逃げ込み、王に救いを求めた。

帝釈天の化した鷹は、同王に「我が食なり」と言って鳩の引渡しを求めるが、王は鳩と同量の我が肉を以て鳩の命に代えんことを願う。そして天秤にかけて鳩と同量の肉を与えようとして、両股、両臂、両脇の肉をつぎつぎと秤にのせるが、鳩の重量に達せず、遂には王自ら立って秤の盤に登ろうとする。しかし体力既になく、力つき気絶して倒れると、帝釈天はその慈悲心の完全なことを理解して本身を現じ、その菩薩行を讃嘆したという話である。

雪山婆羅門（施身問偈）本生

釈尊かって婆羅門と生れて雪山に住し菩薩行を修せられていた時のこと。帝釈天、雪山婆羅門を試みんとて羅刹（鬼神）に化し、彼の近くに歩みよって過去仏の説いた「諸行無常、是生滅法」の半偈を唱すると、智識欲に燃えた雪山婆羅門はその後半の偈の教えをこい、羅刹空腹の故を以て人肉を求めると、彼は我身を与えることを約束して後半の偈「生滅滅已　寂滅為楽」をきくことを得た。そこで雪山婆羅門はこの四句の偈を岩壁に記して高所より投身して約を果さんとすると、帝釈天本身を現じて婆羅門の身を空中に受けとめて、これを讃嘆したという話で、真理の為めに我が身を犠牲にしていとわなかった釈尊前生の物語である。

法隆寺　玉虫厨子密陀絵（部分）

婆羅門投身す。

偈文を岩壁に記す。

帝釈天本身を現わし婆羅門をうけとむ。

摩訶薩埵本生

昔、釈尊が摩訶羅檀嚢王の第三子摩訶薩埵として生れた時のこと。或る日、王子は兄の摩訶波羅及び摩訶提婆と共に林間に遊び、飢餓に迫られた母子の虎に会って大慈悲を起し、衣を脱いで自ら懸崖より身を投じ飢虎の餌食となって之を救ったという話である。

衣を脱いで枝にかけ。

懸崖より身を投じ。

虎の餌食となって飢餓より救う。

燃燈仏授記（儒童布髪授記）本生

二十四仏の第一仏、燃燈仏が出興し給うた時、釈尊は善慧と呼ばれる儒童として生を受けられていた。その燃燈仏が国都に入来されんとした時、善慧はこれを供養しようとして来り、大地のぬかるんでいるのをみて「仏の千輻輪の足をして此のぬかるみを踏ましめることが出来ようか」とて、衣を脱いで路上に敷いたが足らず、更に自らの髪をといて地に敷き、燃燈仏をしてその上を歩かせた。燃燈仏はこの善慧の善行を嘉し、「この百劫の後、釈迦牟尼と名づくる仏となろう」との記別（予言）を授けた。燃燈仏の涅槃の後、この善慧は正法を護持して二万歳に及び、命終えて上生し四天王となり、更に下生して転輪聖王となり、またその寿命を終えて上生、実に上生下生を三十六反くりかえして最後に兜率天上に生れ、諸天主の為めに説法しつつ、やがて悉達多太子として下生して最後の生涯を経て成仏する機会を待期される。

燃燈仏授記本生図（部分）　ベゼクリク（西域）出土

左より，**兜率天宮の説法**，**象形降神**，**托胎**．右下図はその第一景の写真．アマラーヴァティーの欄楯浮彫．現在はカルカッタのインド博物館に収蔵．高さ 85 cm.

兜率天宮の説法。善慧、上述の如く、菩薩行を修し終って兜率天に生れ、諸天主の為めに法を説いていたが、やがて下生して仏となるべき機が到来する。そこで彼は次の五事、つまり①彼を迎える用意が諸衆生の間に成熟しているか否か。②下生の機が到来したか否か。③下生するには何れの国が最もかなっているか。④いずれの種族が最も貴盛であるか。⑤過去の因縁もっとも真正にして我が父母となるべき者は誰か、を検討して、自ら次の如く思った。即ち「今、諸衆生は、みな我が初発心以来、その機よく熟し、清浄の妙法を受くるに充分用意が出来ている。そしてこの三千世界の中で、人間界の迦毘羅国最もすぐれ、諸種族中、甘庶族の後裔の釈迦族が第一で、然もその国主浄飯王の過去の因縁をみるに、夫妻真正にして我が父母とするに足れり」と。

時に、諸天主は菩薩(善慧)の下生すべきを知って「菩薩、久しからずして我等を捨てん」とて、これを悲しみ憂悩するが、菩薩は「まさに知るべし、諸行は皆悉く無常なり、我、今久しからずして、この天宮を捨てて、閻浮提に生れん」とさとして、天宮に於て兜率天上最後の説法を行い、過去諸仏の説き給うた「諸行は無常なり、是生滅の法なればなり。生滅、滅し已りて、寂滅なるを楽しと為す」を説かれた。

象形降神。いよいよ菩薩降胎の時来り、六牙の白象にのって兜率天を発した。書物により六牙の白象と化して降神とも記す。天宮を発するに当り諸天衆奏楽散花してこれを送る。

托胎。時に摩耶夫人眠り安く、その夢中に六牙の白象に乗って菩薩の右脇より胎中に入るを見る。過去現在因果経はこの時を四月八日の明星出づる時と記している。

占夢（上）　中央に浄飯王，左に摩耶夫人．右は夫人の夢を占う善相婆羅門．　ガンダーラ地方出土．高さ 15 cm.

誕生（下）摩耶夫人の右袖の中より釈尊合掌しつつ誕生．他は婇女．もと御物．ブロンズ．摩耶夫人の高さ 16.3 cm.

占夢。摩耶夫人、夢より豁然としてさめ、浄飯王にこれを語ると、王もまた大いに喜び、善相婆羅門を招いて、摩耶夫人の夢を占わしめた。婆羅門はこれを占って、「夫人の懐胎せる太子は、必ずや釈迦族を大いに光顕し、もし出家せざれば転輪聖王となり四天下に王となり、もし出家せば必ず仏とならん」と言ったという。

誕生。摩耶夫人は太子受胎以来、よく禁戒をまもって聖者の行いを修して十ヵ月、いよいよ降誕の近きを知り、王の許しを得て藍毘尼園に遊ぶ。天龍八部、悉く夫人に随従して虚空に充満したという。夫人、園に入り、ここに懐胎以来満十ヵ月を完全に送って、四月八日(因果経は二月八日と記す。印度ではヴァイシァクハ月の後半八日などとする伝説的言い伝えがあったらしく、玄奘はこれを唐月の三月八日にあてている。しかしサンスクリット原典には、この仏誕の日を明記していない)、日の初めて上る頃、摩耶夫人が無憂樹の下でこの枝を手折ろうとした時、その右脇腹を破って出胎、樹下に忽然として生じた七宝七茎の蓮花上に降誕され、扶侍するものなくて自ら七歩を行き、右手を挙げて有名な降誕宣言をしたという。(紀元前五六〇年、宇井博士説四六六年)

サフリーバフロル出土．ペシャーワル博物館蔵．

母后生天。 降誕七日後に摩耶夫人永眠して忉利天に上生。母后の妹、摩訶波闍波提養母となり太子を乳養。

習学技芸。 太子八歳(因果経に七歳)父王は国中の聰明なる婆羅門をして諸学諸芸を教えしめ、十歳に至り大いに技芸を習わしめた。

樹下静観。 十二歳、諸芸にあまねく通達し二月八日立太子灌頂の式が行われた。その直後の一日(或は十六歳の折とす)愛馬犍陟に乗り田野に赴き、農夫の耕作するを眺め、禽獣の互に相い食むを見て、憂愁の念を起し慈悲心を生じて閻浮樹下に結跏趺坐して深く思惟する所があった。父王この様を案じ、その出家を慮って婚姻を急ぐこととなった。(之を婚姻後とする書あり)。

大同雲岡石窟第六洞浮彫

帰城。 浄飯王は太子降誕を知り、自ら藍毘尼園に赴き、太子を抱いて七宝の象の輿にのり、諸臣婇女を従えて帰城した。

天廟参詣。 帰城後、王は釈迦族の社たる釈迦増長薬叉の天廟に太子を抱いて参詣。天神悉く座を立ち太子の足を礼拝した。

命名。 この時、多くの奇瑞現われ、諸々の吉祥事が起ったので、太子に「一切の義成就す」という意味をもつ薩婆悉達多という名がつけられた(第五日)。

占相。 王は群臣に勅し、聰明多聞にしてよく相を占う者を尋ねて太子の相を占わしめた。中に阿私陀仙、神通力を以て虚空に乗じて来り「太子、三十二相を具有、もし在家せば年二十九にして転輪聖王となり、出家せば一切種智を成じ広く天人を済わん」と占った。

競技納妃。父王は阿私陀仙の予言を聴いて太子の出家を苦慮。「速かに別に宮室を造り多くの婇女をして[illegible]しむべし」との意見も出、結局、太子に妃を迎えることが得策と考えた。そこで一計を案じ城中の女を集めて、これに太子自らに宝を施さしめ、その折、太子の目が注がれた娘を太子妃に選ぼうと考えた。所がその際すべての娘は太子を正視出来なかったが、遅れて来た耶輸陀羅と呼ばれた娘は、憶する所なく太子を正視し、その施しを求めた。施与すでに終りたるため、太子自ら指輪をとって与えた[illegible]。娘は[illegible]する色をなして[illegible]って行っ[illegible]国王の密使は、太子の目の注がれ[illegible]の娘と睨んで早速父王に注進、娘の父摩訶那摩に太子妃としてその娘を懇請した。摩訶那摩は、古代印度の結婚法に則り、武技その他一切の技能の競技に勝を得たものに娘を与える旨こたえ、太子が之に優勝、目出度く耶輸陀羅姫をその妃に迎えることになった。太子十七歳の時である。

選妃 太子耶輸陀羅姫に指輪を与う。 ジャワ，ボロブドゥール浮彫．高さ 100 cm.

競技 スワート地方出土．高さ 10 cm.

尒時太子出城東門觀見老人問因緣時

尒時太子出城南門見一病人問因緣時

四門遊観。納妃後十年、太子一日、城の東門より出遊。浄居天(じょうごてん)、太子の出家を成就せんために老人と化して会う、又一日南門より出遊し浄居天の化す病者に会う。暫くして西門より出遊。また浄居天の化す死者に会い、最後に北門より出、下馬して老病死苦につき冥想する時、浄居天また比丘(びく)として見つれ、

大同雲岡石窟．第六洞浮彫　　後宮の歓楽

父王との会見

老者に会う（東門出遊）

車匿，犍陟との訣別

出城　　閨房脱出

アマラーヴァティ浮彫．大英博物館蔵

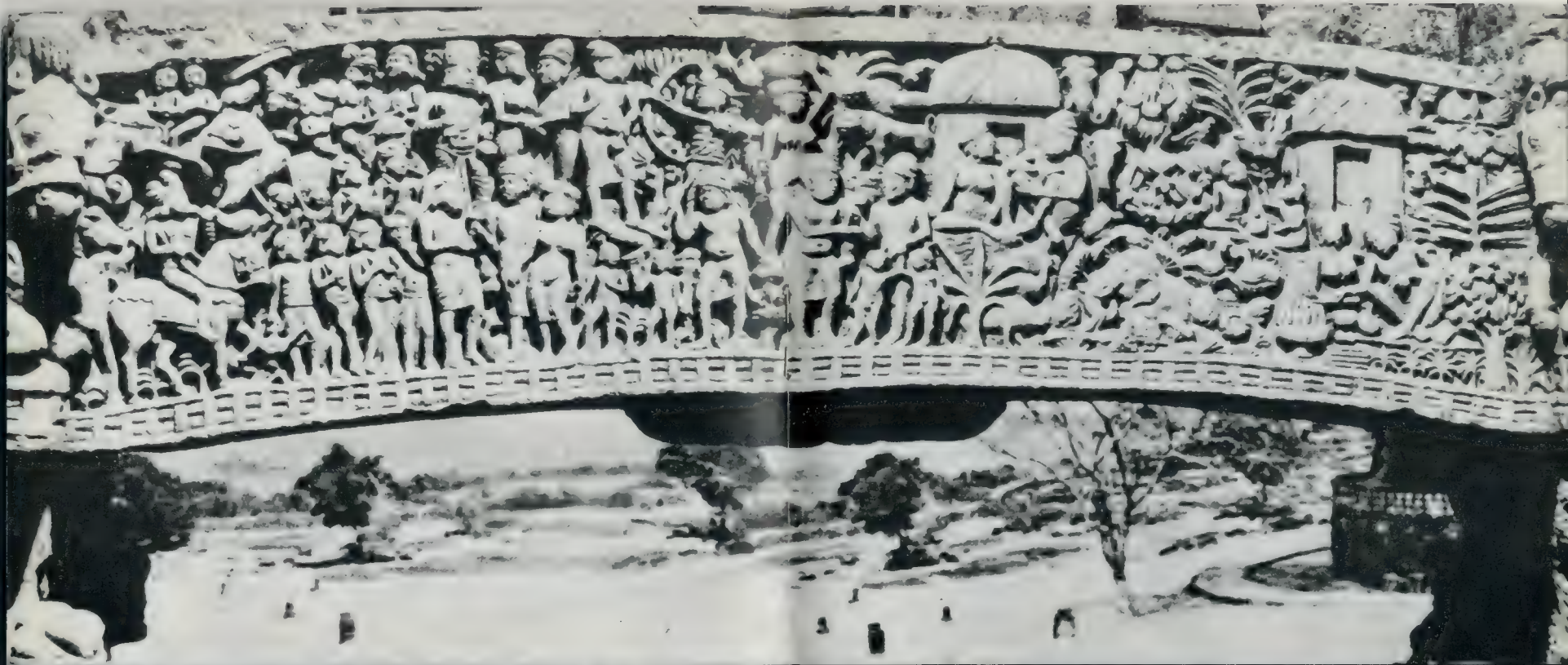
↑ **閨房脱出**　ガンダーラ出土．大英博物館蔵
高さ 15 cm.

← **閨房脱出**　悉達多太子の頭部を失う．背後の人物は浄居天，睡るは耶輸陀羅．ハッダ出．ギメ博物館蔵，高さ 23 cm.

閨房脱出。太子は納妃後も妃と接することなく、為めに痛く憂えていた父王は、太子の四門遊観の後いよいよ楽しまざるを見て、益々心を痛め妃を初め婇女たちに太子の傍を離れざるように命じた。そして太子二十九歳となるや、父王は阿私陀仙の予言を想い、今暫くして(因果経は七日とす)出家せざれば、在家して転輪聖王とならんとて、方便を案じて「国に嗣は大切である。願わくば我がために一子を儲けて後に出家せよ」と太子に告げた。すると太子は「仰せの如くせん」と答えたので父王は「太子七日の中に必ず児なかるべし、もしこの期を無事に過ぎなば、予言の如く出家なからん」とて大いに喜[illegible]しかし、太子が左手を以て己の[illegible]ちに太子の児[illegible]

出家踰城。太子、馭者車匿の所に至り、愛馬犍陟を引き出させた。この時、太子の身より光明が輝き十方を照らし「過去の諸仏、出家の法なり」と獅子吼されたという。太子犍陟に跨るや、諸天、馬の四足を捧げ、帝釈天、天蓋をとって従う、城門に向うと、城の北門ひとりでに開き、空中の諸天は太子の出家を讃歎しつつ従った。かくして太子は跋伽仙人の苦行林へと向った。

出城。[illegible]中央は車匿[illegible]
訣別．アマラーヴァティー出[illegible]

[illegible]いるのは帝釈天である。
ロリアーン・タンガイ出．カルカッタ博物館蔵．高さ 45 cm.

サンチー大塔北門第三横梁背面浮彫　毘輪安咀羅本生図

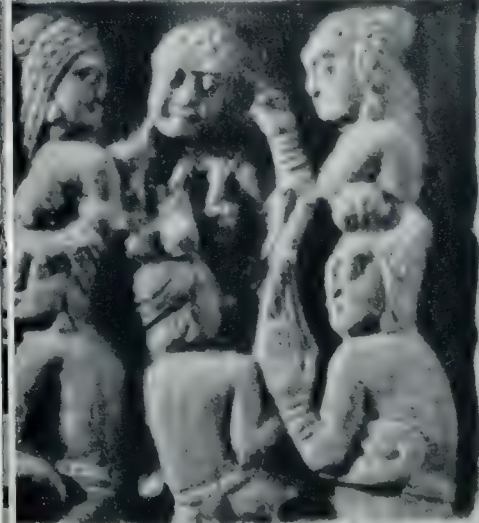
サーンチーの本生図、仏伝図

貧しき多くの人々のために、声なき言葉を以て、教祖釈尊の前生に於ける善行苦行、積善修道の物語を語り、或は浄飯王の王子悉達多太子として此の世に降誕されてから正覚成道の応果を得られるまでの苦悩修業のあとや、衆生済度のために行われた大慈大悲の菩薩行の数々を語りつづけて来た多くの本生図や仏伝図は、長い歳月の間に、自然の侵蝕や異教徒の迫害を受けて、すでにあとかたもなく滅び去って行ったものも、決して少くなかった。現存するものは、恐らく、その極く一部分にすぎないものであろう。

遺品の分布は、一応アジアの全仏教国圏内にあまねくわたっているが、その数に於て、濫觴の地たる印度に最も多いことは当然である。しかし、印度に於てはまた、最も多く回教徒を初め異教徒の排仏毀釈に会い、殊に回教徒の印度侵犯の通路にあたっていたガンダーラ地方に於ていちじるしいものがあった。その数に於て、またその主題の多様さに於て、他のいずこよりも豊富な遺例をのこしながら、ガンダーラの遺品に完全なものの少いのは[illegible]った。

これに反して、中印度のサーンチーは、アショーカ王時代にこそ、同王の若き日のロマンスを記念すべき地として多くの人々の注目を惹き、或は仏弟子の舎利弗や目犍連の遺骨を初め、アショーカ王時代に遠く雪山地方へ伝道に赴いた末示摩長老の舎利を葬る聖地として多くの敬虔なる仏徒の巡礼の杖を引いたものの、その後は此の僻地の故に忘れられ、結果的には回教徒のあくなき破壊を免れて往時の美術的景観をほぼそのままに今日に残すことを得たのであった。大塔、第二塔、第三塔をめぐる欄楯や塔門の表面に賑やかに装厳された無数の浮彫は、今も昔に変らぬ声なき言葉をもって、これに耳かたむける人々の心に、ささやいているのである。その数は、単なる装飾文や図相の明らかでないものを除いて、いわゆる本生図が六種八図、仏伝図は実に二十八図にのぼり、第二塔の欄楯における本生図一図以外は、すべて大塔の四基の塔門に刻まれている。従ってサーンチー大塔の塔門浮彫こそは、印度に於ける仏教伝説図の最も例数に富み且つ最も完好なる貴重な遺例というべきであろう。

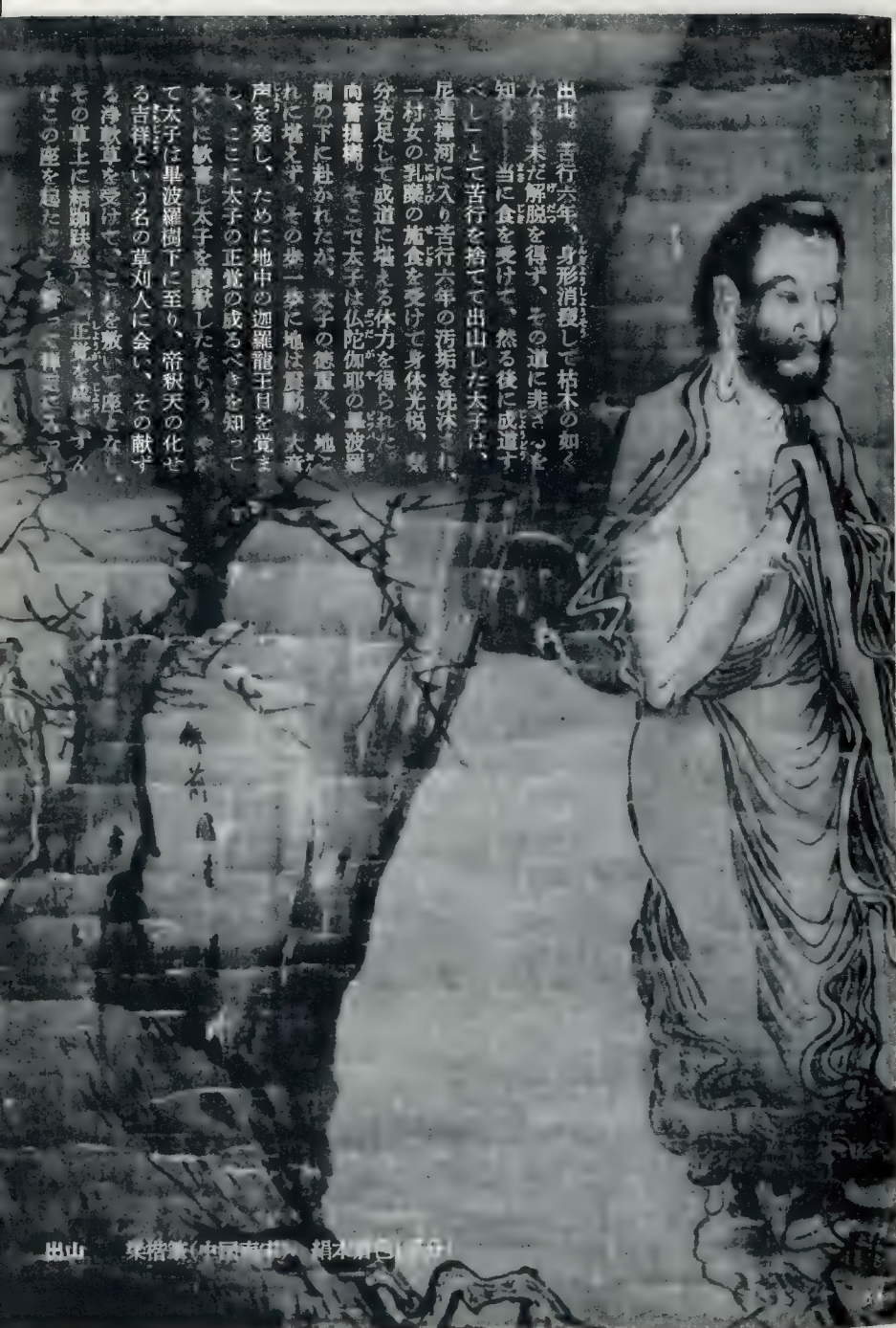
車匿の帰城。太子と別れた車匿が、犍陟を牽き、太子の瓔珞などを持って、悲泣嗚咽しつつ帰城すると、城中の人は驚愕、懊悩せざるはなく、宮中の悲嘆は特に深く、妃耶輸陀羅の車匿を詰り、犍陟を責める声は誠に悲痛の極みであった。

剃髪。車匿、犍陟と別れた太子は利剣を以て自ら鬚髪を剃り（本行集経は化浄髪師が剃ると記す）、一切のために煩悩を断除せんことを発願。帝釈天はその鬚髪を一毛もあまさず天衣を以て受け、忉利天にのぼって、その天宮最勝殿内に安置し、諸天と共に之を供養したという。

太子は浄居天の化した猟師と衣を代えてのち、跋伽仙人の住所を訪ね、ここに一宿するが、この仙人は苦行すと雖も解脱真正の道に非ず、止住すべからずとして、その地を去り、阿羅邏仙人の許に向う。

忉利天上の仏髪供養

山
を受け
人を訪れた
足し得ず、更に
を訪うたが、これにも
得ず、遂に尼連禅河の畔、
伽闍山(象頭山)の苦行林に
於て六年の苦行に入られた。
六年苦行。この苦行の様や、
数々の断食で痩せ衰えた太
子の肉体の様は馬鳴のブッ
ダ・チァリタに優れた詩的
表現を以て歌われている。

出山。苦行六年、身形消痩して枯木の如くなるも未だ解脱を得ず、その道に非ざるを知り「当に食を受けて、然る後に成道すべし」とて苦行を捨てて出山した太子は、尼連禅河に入り苦行六年の汚垢を洗浴され、一村女の乳糜の施食を受けて身体光悦、気分充足して成道に堪える体力を得られた。

向菩提樹。そこで太子は仏陀伽耶の畢波羅樹の下に赴かれたが、太子の徳重く、地これに堪えず、その歩一歩に地は震動、大音声を発し、ために地中の迦羅龍王目を覚まし、ここに太子の正覚の成るべきを知って大いに歓喜し太子を讃歎したという。やがて太子は畢波羅樹下に至り、帝釈天の化せる吉祥という名の草刈人に会い、その献ずる浄軟草を受けて、これを敷いて座となし、その草上に結跏趺坐し、「正覚を成ぜずんばこの座を起たじ」と誓って禅定に入った。

出山　梁楷筆（中国南宋）絹本着色［部分］

畢波羅樹下，迦羅龍王の讃仰
タフト・イー・バハイ出土．

草刈人より浄軟草を受く．高さ 33 cm．
シクリー第7塔．ラホール博物館蔵．

降魔。太子、畢波羅樹下に坐して「正覚を成ぜずんば、この座を起たじ」と誓言を発するや、天龍八部は悉く歓喜して、虚空に踊躍讃歎したが、欲界第六天に住む魔王波旬は大いにこれを喜ばず、太子の成道を阻害せんものと思う。即ち、自ら弓箭をとり、また[illegible]の魔女を率いて、畢波羅樹下に来り、或は武器を以て威嚇、或は妖の魔女の媚態を以て誘惑、これによって太子の正覚を成ぜんとする大志を挫かんとした。しかし魔王の射た箭は空中に停り、やがてその鏃は下向して、変じて蓮花となり、また太子を誘惑せんとした三人の魔女も醜き老女と変じ、魔王の妨害は成らなかった。そこで魔王は他の方便を考え、甘言を以て太子を誘ったが、これまた不成功に終った。そして一度び太子の右手、膝上より伸びて大地を按ずるや、地神、忽然として大地より湧出し、魔軍は一斉に顛倒狼狽して退散。諸天衆は、太子の成道を讃歎して虚空に充満したという。

降魔成道

降魔成道

サーンチー大塔
南門右柱浮彫

成道。畢波羅樹下に魔王波旬を降伏したのは因果経によれば、二月七日の夜である。そしてその第三夜に十二因縁を観じて、生死の原因を遡って無明に結帰、ここに一切種智を成じて正覚を得た訳であるが、諸仏典は、これ以前の太子を菩薩とよび、以後を如来、或は世尊と称している。ここでも、これにならって成道以後の太子を釈尊と呼ぶことにする。

二商供養。釈尊は成道後も引きつづき菩提樹下に趺坐して七日の間、一心に思惟をつづけられ、降魔前に一村女より乳糜の施食を受けて以来、別に食する所がなかった。偶々、北天竺より来た二人の商主、帝梨富娑、跋梨迦は守護神の啓示を受けて麨酪蜜(麦粉、酪乳、蜜)をまぜた摶(団子)を献ずるが、釈尊器を持たず、外道の如く手にて受ける事が出来ずにいると、四天王各石鉢を持ち来りて釈尊に捧ぐ。釈尊はその一鉢を受くるもよからずとして、四王より四鉢を受け、神通力を以てこれを一鉢とし、二商主の奉食を受けられた。

梵天勧請。その後、釈尊は目真隣陀樹下に入禅されたが、その七日の間降雨あり、この樹下の龍王釈尊の頭上を覆うて守護したという。その後また阿踰波羅尼拘律陀樹下に趺坐して説法を躊躇されていると、梵天等、釈尊の説法を三度び勧請、満七日に至って釈尊黙然としてこれを受け給うた。

アマラーヴァティー
欄楯浮彫．径 84 cm.

仏鉢供養　太子，村女の乳糜の施食をうけ，食し終ってその金鉢を尼連禅河の水中に投ずるや，海龍王これを受けて供養せんとするが，帝釈天金翅鳥と化し，その嘴をもって金鉢を奪いとり，忉利天にのぼってこの仏鉢を供養した．

ガンダーラ・シクリー塔基浮彫．ラホール博物館蔵．高さ 33 cm.

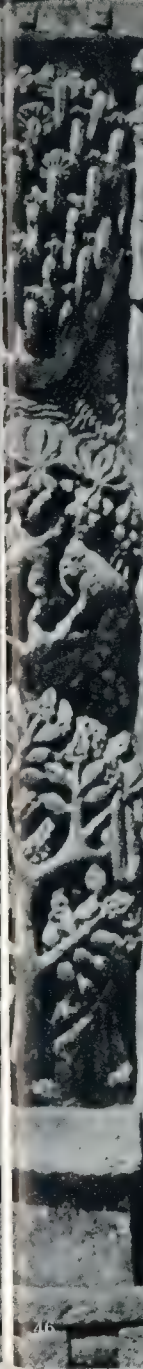
初転法輪　釈尊の左に憍陳如等５人の比丘を現わす　ナーガールジュナコンダ浮彫　[illegible]博物館蔵　高さ72cm

初転法輪。釈尊、梵天の勧請を容れ、衆生済度の決心をなし、先ず誰がために法を説くべきかを考えられた。そして第一に阿羅邏仙人のことを想い、彼のために法を説かんとされたが、すでに彼は亡く、また次に考えられた鬱陀羅仙人もまたすでにこの世になかった。

そこで釈尊は、六年苦行を共にした憍陳如等五人を想われ、彼等の止住する婆羅痆斯国の鹿野苑に赴かれた。そしてここで初めて法を説き、憍陳如等五人を最初の仏弟子とされた。

釈尊の説法の凡ゆるものを説得して行く様を，凡ゆるものを破砕し，従えて行く転輪聖王の金輪にたとえて法の輪を転ずるといい，釈尊の姿を人間的形態を以て表現することが禁じられていた古代には，しばしば車輪状に現わした法輪を以て釈尊の説法のシンボルとした。

初転法輪　アマラーヴァティー浮彫

化三迦葉。 釈尊は初転法輪の後、王舎城に向い、尼連禅河畔の優楼頻螺村に於て、事火外道の迦葉三兄弟を十八の神変を行って帰依せしめた。先ず長兄の優楼頻螺迦葉を訪ね一泊の宿を請い、浄室なき故を以て断られるが、毒龍住むという石室を敢えて借りて宿し、その毒龍を調伏して鉢中に納めてしまった。また事火外道の彼等は日に三度火を祀るが、或日釈尊神通を以て、彼等火を燃さんとしても燃えしめず、又消す段になっても消えしめず、更に薪を割らんとすれば、斧上らず、上げた斧は降さしめなかった。最後に釈尊は、神通を以て尼連禅河の水を断ち割り、その河底を砂塵を上げて闊歩、やがて、あやしんで舟を出した三迦葉の舟中に水中より舟底を破って入られたが、舟中には一滴の水も浸水しなかったという。

◆ **尼連禅渡渉の奇蹟**　図中中央の盤石状のものが、河底を歩む釈尊を現わす（釈尊の姿を表現せず）。舟中の三人物及び下方の礼拝する四人物は三迦葉とその弟子である。

◆ 石室内の毒龍盛鉢

◆ 聖火不燃不滅・斧不挙不降の奇蹟

サーンチー東門左柱内側浮彫

祇園布施、優楼頻螺三迦葉は、王舎城附近に於て信望厚かった思想家であったから、その帰仏の民衆に与えた影響は大きく、爾来釈尊に帰依するもの漸く多きを加えたが、頻毘娑羅王を初め、後に十大弟子の中に数えられた舎利弗、目犍連、摩訶迦葉、迦旃延等の帰仏を見た。その後釈尊は故郷の迦毘羅城に帰郷して父王の為めに説法、異母弟の難陀、実子羅睺羅が出家した。釈尊はその後再び王舎城に帰えり、頻毘娑羅王の寄進した王舎城外の竹林精舎に止住された。その頃、舎衛城に給孤独長者という人があり、深く釈尊の徳に帰依して、釈尊ならびに仏弟子に精舎の寄進を思い立ち、偶ゝ祇陀太子の園林最も優れて最適だったので、これを購わんとした。しかし、祇陀太子は仲々この地を譲ろうとはしなかったが、長者の熱心な求めを遂に断るに窮し、戯れに、黄金を以てその地を敷き満し得るならば之を譲らうと言った。すると長者は車にて金貨を運び、遂にその園中に敷きつめると、太子も長者の熱誠に驚き、長者の精舎建立奉献に協力したという。

水瓶を持つは布施する長者，瓶瀉布施を受ける釈尊の姿は例の如くあらわされていない(布施を受ける時は手に水を注がれる風習が，当時の印度に行われていた)．

祇園布施　　ボッド・ガヤー欄楯浮彫

祇園布施　……欄楯浮彫

須摩掲陀の伝道。 釈尊が、給孤独長者須達多の奉献した舎衛城の祇園精舎に止住せられていた時のこと。長者に須摩掲陀という娘があり、長者の友の鴦伽国の富楼那跋陀那城の護戸羅長者の子牛授に嫁していたが、その婿家は裸形外道すなわちジャイナ教徒であった。しかし彼女はその様な異教徒の家庭内にあって、一族の強制に相抗し、絶えず仏を念じつつ、よくその信仰を維持し、遂には釈尊の助力をも得て婿家の一族を仏教に帰依せしめてしまったという。

諸王の帰仏。 これより先、釈尊は優楼頻螺村の三迦葉を教化した後、杖林に於て頻毘娑羅王の訪問を受け、帰仏したばかりの迦葉をして身上より水を出し、身下より火を出し、また身上より火を出し、身下より水を出す神変を演ぜしめて、王の一統を帰依せしめたが、その後、父王浄飯王の要請を受けて故郷迦毘羅城に帰郷、城外の尼拘律陀樹園にて空中を遊行する奇蹟を演じ、父王を初め釈迦族の人々に法を説かれて彼等を帰仏せしめられた。また舎衛城に止住中には、その国王波斯匿王も、釈尊の遊化をきいて来拝、その説法を聴いて釈尊に帰依したということである。かくて、この恒河流域の地方の三人の有力なる王の帰依を得て、仏法は、この地方一帯を中心に、いよいよ隆盛となって行った。

波斯匿王の訪仏　サーンチー北門左柱正面

[illegible]王の訪仏と杖林の奇蹟[illegible]

[illegible]の伝道　[illegible]　ラホール博物館蔵　34×50.5[illegible]
その[illegible]て右の[illegible]する人物が[illegible]

舎衛[illegible]
て、ま[illegible]道の[illegible]
これを摧伏せ[illegible]の
神変を演じ給うたが、その一つは、六師外道を伏するために行われた神変で、神通を以て、足下に水流をほとばしらせ、上身より火焔を発して虚空を遊行された。

舎衛城の[illegible]
メ博物館[illegible]
光背に[illegible]
その下の龕内に訶梨帝母と執金剛神.

昇天。釈尊、[illegible]の怠けて法を聴かざるを憂い給い、衆生をして法を渇仰せしむべしとて、誰にも告げず秘かに祇園より去り、忉利天上に上天、ここで亡き母后摩耶夫人のために説法し給うた。その間地上では久しく釈尊の姿を拝し得なかったため熱心な信者だった波斯匿王と優塡王は思慕のあまり病に伏し、これを苦慮した臣下が方便として釈尊の像を作って両王の病を癒したといい、仏典にはここに初めて仏像ありと伝えている。これが単なる伝説であることは言うまでもない。

三道宝梯降下。忉利天の波利質多羅樹下で母后を初め多くの天衆のために説法し給うた後、釈尊は瑠璃及び金銀（一説、金銀水精）よりなる三道の宝梯を、梵天帝釈天を左右に従えて下り、僧伽施国の優曇鉢樹下に降下された。この時、優鉢華色比丘尼、転輪聖王の姿に扮して真先きに仏前に至り、その足を礼拝した。彼女に先を越された波斯匿、優塡、頻毘娑羅等の王は大いに之を怨んだという。

三道宝梯下　釈尊の姿を刻まず，梯上梯下に仏足跡を印して釈尊の宝梯を下られたことを現わしている．バールフト浮彫．

酔象調伏。釈尊を敵視する従弟（一説、甥）の提婆達多（デーヴァダッタ）は、かの頻毘娑羅王の太子阿闍世（あじゃせ）に会い、自ら神通を行ってその師事を受け、太子を唆かせて父王を弑逆せしめ、自らも釈尊殺害を計った。いずれも不成功に終ったが、その最も著名な事件が王舎城に於ける釈尊の酔象調伏である。即ち提婆達多は釈尊の城中を遊行し給うを見て、阿闍世太子の所有する大象に酒を飲ませてその途上に放ち、釈尊を踏み殺させんとしたが、酔象は仏前に至るや前脚を屈して跪拝し、釈尊の足を甜めて恭順したという。

闍王の帰仏。阿闍世王は父王弑逆の呵責に堪えず仏心漸く萌していた所、城中の医師耆婆迦（ジーヴァカ）の勧めで仏前に至り、懺悔して遂に釈尊に帰依した。釈尊入滅の折、偶々沐浴中の闍王に、大臣の婆利迦（ヴァルシァカーラ）は此の悲報を奏上するに忍びず、無言で釈尊の四相を描いた布を拡げて見せるや仏滅を知った王は悲嘆のあまり失心したという。

酔象調伏　アマラーヴァティー[illegible]　径 85 cm　[illegible]博物館蔵.
荒れ狂う酔象と恭順した象[illegible]右端[illegible]と阿難を現わす。

阿闍世王の沐浴　西域キジール[illegible]　フ[illegible]蔵
[illegible]　降魔成道(左上), [illegible]右下), [illegible]描く

曠野夜叉教化。舎衛城の南、恒河河畔の阿羅毗に阿吒婆拘(曠野)とよぶ食肉夜叉がいた。或日、阿羅毗の長者が鹿を追って森に迷い、この夜叉に捕えられ、日一人の子供を供する約束で釈放されたが、自分の子を供さねばならぬ日に釈尊来り、大力鬼に化して夜叉を調伏、夜叉は長者の子を釈尊に奉って仏教に帰依したという。

伊羅鉢羅龍王礼仏。迦葉仏(過去仏)の時、一比丘、伊羅鉢羅樹を伐ってその罪を懺悔しなかったために醜い龍身となり五苦を受け、次仏の出世を得てその妙法をきけば龍身を脱することが出来ると予言された。そこで仏のみ説き得る偈を龍女にとなえさせつつ仏の出世を待っていると、釈尊の出世を知り、仏前に至って礼仏し、その妙法をきいて龍身を脱することが出来た。

獼猴奉蜜。釈尊、毘舎離国の大林に遊行された時のことである。諸比丘、各自の鉢を露地に置き、釈尊も仏鉢をそれらの中に置かれたが、一頭の猿(獼猴)来り、多くの鉢の中より仏鉢を選んで傍の娑羅樹に登り、蜜をとって鉢に満し、これを仏前に捧げた。

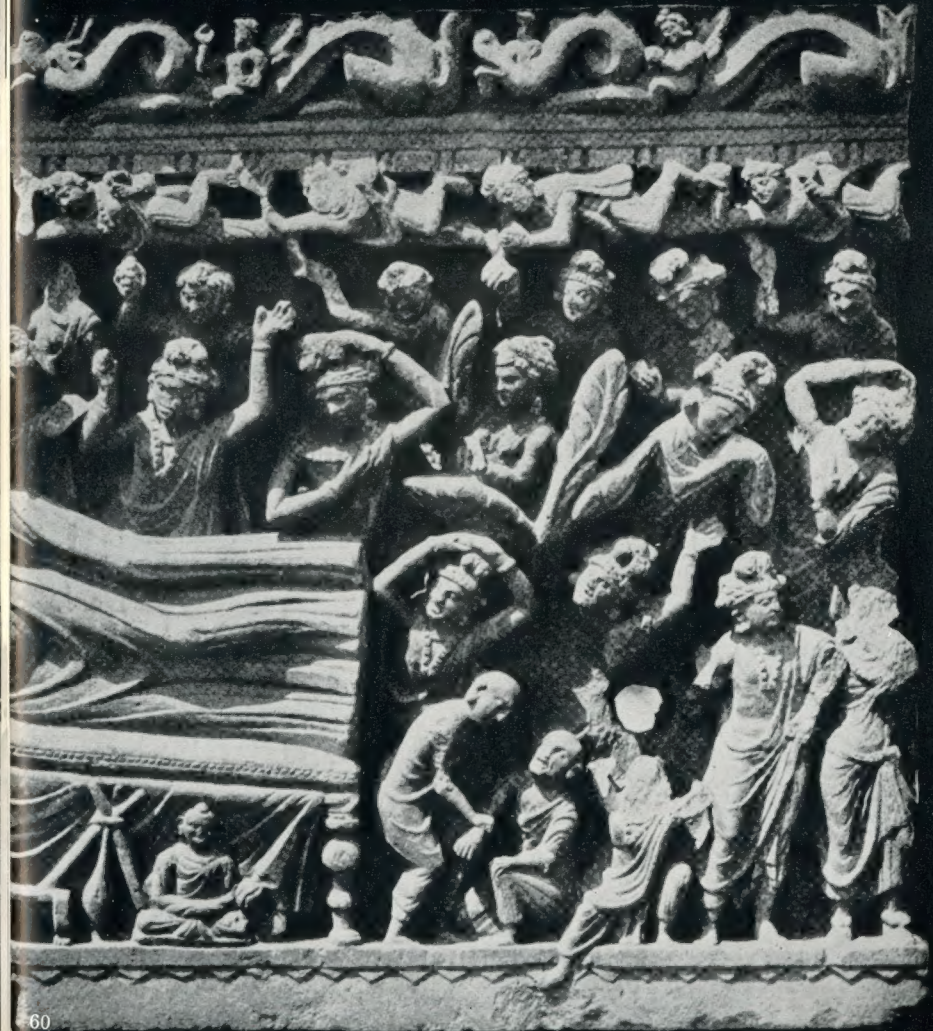
……ている——サーンチー北門右柱……

帝釈窟説法。一時釈尊、王舎城の
婆羅村の北、毘陀山の因陀羅
にあって禅坐し給うた時、忉利
釈天、仏前に詣でてその法を聴
い、先ず音楽神の般遮翼(乾闥婆
して窟前にて琉璃琴を奏せしめて釈
耳を楽しませ、然る後、諸天を率
所に至り、説法を聴聞したと、

阿波
龍泉に住
し、国人大し
尊、神変を以て
泉中に深く逃げ入
剛杵を以て山を打つ
摑り得ず、出でて釈尊に帰依したと。

仏前に跪拝する龍王龍妃眷属その上に金剛杵を振う執金剛神. 釈尊の傍にも執金剛神.

帝釈窟説法　マトゥーラ出.
カルカッタ博物館蔵.

大般涅槃。釈尊、成道後第四十五年の最後の雨期を毗舎離国の竹林村に止住、ここで病を得られ、往路を経て舎衛城に戻り、祇園に止られたが、この時、舎利弗は七日後に入滅すべきを自覚して釈尊に訣別、故郷那羅陀村に帰り、生母を帰仏させて、その後入滅した。諸人集って荼毘(火葬)に付し、均頭沙彌遺骨を持って祇園に至り、阿難を通じて仏前に報告した。その後釈尊は、王舎城の竹園に移られたが、この時目犍連が裸形外道のため、盗賊の手にかかって落命。釈尊はこの両仏弟子のために建塔の後、王舎城より恒河に沿って東し、河を渡り毗舎離に向い、遮婆羅城に至って三月後に涅槃に入るべきを思念し給うた。その後、波婆城にて周那とよぶ鍛工の子の所有林菴婆林に入り、その供養を受け給うたが、釈尊の病はいよいよきびしくなり、その苦痛に堪えられつつ拘尸那竭羅城外に至り、その沙羅園中の双樹の間に阿難に命じて牀座を設けしめ、頭北面西、右脇を下にし足を累ねて臥せられ、将に涅槃に入らんとされる時、阿難の為に大善見王の本生を説き給い、更に彼をして城中に釈尊の入涅槃を告げしめ給うた。その折、百二十歳の老婆羅門須跋陀羅なるもの来り、釈尊に疑義をただせば、釈尊この為に法を説き給うて化導し、四ヵ月の別住なしに比丘となし、最後の仏弟子とし給い、次いで寂然として大般涅槃に入り給うた。諸天衆、仏弟子を初め多くの衆生、五十二類の生類、集って釈尊の入滅を哀歎したという。阿難、阿那律等の諸弟子、拘尸城外東郊の天冠寺にて遺体を荼毘せんとしたが、火滅して燃えず、大迦葉、仏滅を知って遠くより来り合するに及び、香薪即ち燃えたという。

涅槃　ロリヤーン・タンガイ出土. カルカッタ・インド博物館蔵. 高さ 241 cm.

再生説法。釈尊、涅槃に入り給うたので、仏弟子たちは転輪聖王の法にならい、仏体を金棺におさめ奉った。この時、仏弟子の一人阿那律は忉利天にのぼり、釈尊の母后摩耶夫人の所に往きて仏滅のことを告げると、摩耶夫人大いに悲しまれて懊悩のあまり、忉利天より降天して釈尊の遺体をおさめた仏棺のもとに来られ、或は仏衣をとり、或は仏鉢、錫杖等を手にして悲泣された。その時、釈尊は一大神力を以て、金棺を内より開き、合掌して起ち出られ、母后摩耶夫人を説法慰藉された。その折、仏身の毛孔より千光明を放ち、その一々の光明中に千体の化仏があり、これが悉く合掌して摩耶夫人に向われたという。

分舎利の戦。釈尊入涅槃後、遺体は荼毘に付されたが、釈尊を敬仰する七国の王は、仏舎利の分与を強要して軍を起し、拘尸那竭羅城を囲んだ。この時、香姓という婆羅門が調停に立ち、仏舎利はそれら八国に平等に分配された。なお、調停者の香姓婆羅門はその鉢を得、更に分舎利に遅れて来た畢鉢村の孔雀族はその折残された灰炭を得、それぞれ舎利塔、瓶塔、炭塔を建立したという。右の十塔の中舎利塔八塔は、阿育王の時、龍王の護塔した羅摩村の一塔を除いて開かれ、改めて同王によって八万四千塔の仏塔が建てられたという。

分舎利仏土　奈良　法隆寺五重塔，西面．

再生説法（**金棺出現**）（部分）　京都．長法寺蔵．159×228 cm．（全図）

釈尊在世時のガンジス河流域地方

●古址.○及び( )内は現代の地名

略年譜

仏誕 紀元前五六〇年。宇井伯寿博士説四六六年。諸説多し。藍毘尼園にて摩耶夫人の右脇より出胎。月日はサンスクリット原典には明記せず。漢訳仏典は四月八日。西域記には吠舎佉月(三月)の後半八日(八日)或は一五日(一五日)とする。

(仏誕後第五日頃) 命名式、薩婆悉達多と名づく。占相。天廟参詣。

(〃 第七日) 母后摩耶夫人薨ず。摩耶夫人の妹、波闍波提、浄飯王の妃となり太子を養育す。

七歳(或は八歳) 習学武芸。

一〇歳 武芸を競う。

一〇～一二歳 灌頂立太子(一説一五歳)。

一二歳 樹下静観(一説一六歳)。

一七歳 納妃(一説一九歳)。

一七～二七歳 納妃後十年宮中にあり。その間、四門遊観。

二九歳 出家。

二九～三五歳 六年苦行。

三五歳 苦行を捨つ。村女の乳糜供養。降魔(因果経、二月七日夜)。成道(因果経、降魔後第三夜。西域記三月八日或は一五日)。

四相図、八相図の遺例

釈迦四相図。 釈尊の生涯に於ける最も重要な事件たる仏誕、降魔成道、初転法輪、涅槃の四事を四大事といい、これらが行われた藍毘尼園、仏陀伽耶、鹿野苑、拘尸那竭羅を仏蹟四大霊場といった。この四大事を一連のものとして表現した絵画や浮彫を釈迦四相図といい、古く釈尊の姿を人間的形態を以て表現することが禁じられていた時代には、蓮華、菩提樹、法輪、仏塔を以て此の四大事をシムボライズしていた。本図はサールナート出土の釈迦四相図の浮彫である。サールナート博蔵。

釈迦八相図。 前述の四相に更に別の四事を加えたものを八相図というが、四相図の場合と異り、他の四相は必ずしも一定していない。八相図が好んで作られた摩竭陀地方では普通、前述の四相の他に三道宝梯降下、酔象調伏、舎衛城外の神変、獼猴奉蜜の四事を加え、多くは降魔成道を中央に大きく現わし、他の七相を後屏に小さく浮彫している。パーラ朝時代の釈迦八相図浮彫。カルカッタ印度博蔵。

(成道後第七日) 二商主の麨蜜供養。迦羅龍王、文鱗(目真隣陀)龍王教化。

(成道後二一日間中) 梵天勧請。

(〃 第二一日) 初転法輪。憍陳如ら五比丘帰仏。

三七歳(成道後第二年) 三迦葉帰依。頻毘娑羅王の帰仏。頻王、王舎城の竹園精舎を奉献(伽藍の初め)。舎利弗、目犍連(共に十大弟子の一人)等帰仏。迦施延(阿私陀仙の甥)、大迦葉(共に十大弟子中の一人)出家。釈尊故郷迦毘羅城に帰り、父王及び同族のために説法。難陀(釈尊の異母弟)、羅睺羅(釈尊の子)等出家す(一説、これを波斯匿王の帰仏後とす)。摩竭陀国への帰途、阿難、阿那律、優婆離(共に十大弟子中の一人)提婆等出家す。

三八歳(成道後第三年) 舎衛城の給孤独長者、祇園を寄進。祇陀太子の帰仏。波斯匿王帰仏(一説この年帰郷説法)。この年舎利弗、王舎城の外道を催伏して帰仏せしむ。

四〇歳(成道後第五年) 父王浄飯王薨ず。釈尊帰郷、同族と共に父王を荼毘。大林精舎に帰る。養母にして叔母の波闍波提、妃の耶輸陀羅ら出家(比丘尼の初め)。

四一歳(成道後第六年) 頻毘娑羅王第一夫人帰仏。釈尊忉利天に昇り母后摩耶夫人の為に説法。優塡王、波斯匿王の家臣仏像を刻む。

四二歳(成道後第七年) 三道の宝梯を下って僧伽施国に降下(滞天三月という)。

五一歳(成道後第一六年) 阿吒婆拘夜叉(曠野夜叉)調伏舎衛城の神変この年か。

七三歳(成道後三八年) 提婆達多一派を開き、阿闍世太子の外護をうけ、太子をして父王頻毘娑羅王を弑せしめ、釈尊の布教を妨害す。頻王妃韋提希夫人(波斯匿王の妹)、その子阿闍世王の悪虐を悲しみ釈尊に訴う。波斯匿王と阿闍世王の戦あり。提婆達多死す。

七四歳(成道後第三九年) 阿闍世王帰仏。

八〇歳(成道後第四五年) 釈尊、吠舎離国の竹林村にて最後の雨期を送る。ここで病を得。舎衛城に帰り祇園に住む。舎利弗入滅。目犍連殉教。釈尊両弟子の舎利を葬り建塔。養母波闍波提、釈尊の入滅を見るに忍びず、釈尊の入滅に先立って入滅。拘尸那竭羅城外の沙羅双樹下に釈尊入涅槃。紀元前四八〇年(宇井博士説、三八六年)。阿難、阿那律等仏弟子、拘尸那竭羅城外の天冠寺にて仏体を荼毘。八国、仏舎利を八分して仏塔を建つ。

托胎占夢仏誕天廟参詣図。 托胎、仏誕に連続する四事件を扱ったもので珍しい例である。右下の仏誕及び左下の天廟参詣に於ては釈尊の姿を刻まず、前者に於ては四天王の捧げる絹の上に小さな仏足跡をあらわし、後者にあっては、養母波闍波提の捧持する絹の上に仏足跡を刻んでいる。アマラーヴァティ浮彫。

涅槃　　敦煌出

¥ 100